『百科全書』とその時代展

l 'Encyclopédie et son temps

1999年11月22日（月）～28日（日）

名 古 屋 大 学 附 属 図 書 館

目　　次

展示会開催にあたって …… 1

百科全書（アンシクロペディ）の時代 …… 2

Ⅰ『百科全書』と影響関係にある百科事典など …… 4

Ⅱ『百科全書』に執筆した人々とその著作 …… 7

　A　本編の執筆者

　B　補遺の執筆者

参考文献 …… 20

図　版 …… 21

展示会開催にあたって

このたび名古屋大学附属図書館では、所蔵する西洋初期刊本の中から、フランス近代を飾る『百科全書』とその影響を受けた18世紀の事典類および『百科全書』の執筆者の著作を展示し、合わせて講演会を開催することになりました。

百科事典は、最近ではCD-ROM化され、豊かな色彩や音声とともに提供されるようになりましたが、約250年前に出版された『百科全書』は、近代的百科事典の先駆をなすものとして、その後の百科全書の発達に大きな影響を与えたものですが、今日なお今後の百科事典のあり方をその原点に戻って考える好材料としてその価値をとどめていると言えましょう。

本学には、イギリスやフランスの啓蒙思想に関わる文献がよく集められており、『百科全書』執筆者の著作の原典も少なからず所蔵されておりますので、いわゆる「百科全書派」と呼ばれるフランスの啓蒙思想家の活躍ぶりも、これらの所蔵図書から概観できることになりますので、今回のような展示会を企画した次第です。

展示する書物の一部は部局図書室に所蔵されているものですが、大半は、大型コレクションとして中央図書館で収集され保存されている図書です。しかしながら、これらの書物は、貴重書室に納められており、またそのすべての目録が公開されているわけではありませんので、この機会に名古屋大学関係者のみならず、より多くの学外の皆様にもご覧いただき、普段あまり目にすることのない18世紀西洋の出版物への理解を深めて親しんでいただくとともに、今後、この分野の原典がより多く収集され、これらの書物を利用して、より活発な研究・教育活動が展開されるよう願っております。

最後になりましたが、短かい限られた期間にもかかわらず、この展示会を準備するために、ご協力をいただいた諸先生方および図書館職員に厚くお礼を申し上げます。

1999年11月22日

名古屋大学附属図書館長

成瀬通孝

百科全書（アンシクロペディ）の時代

ヨーロッパ18世紀は理性の時代といわれる。既成宗教と伝統的精神の秩序が解体していくなかで、理性は勝利を確信し、宇宙と世界に、時間と空間に、自然、社会、さらには人間自身へと、休むことなく探求をすすめた。ルネッサンス以来の新しい学問と知識と思考方法を集合し、編集し、人類の共同資産とする必要が高まっていった。その時、出現したのが、百科事典という新しい知の形であった。百科事典は、一方で、作る側において圧倒的多数の知識人の共同作業を可能にし、他方で、読者の側において自由な選択的利用を可能にした。理性と実学の時代にふさわしく発明された知の方法であった。

百科事典刊行の動きは、大陸では、Ｐ．ベールの『歴史批評辞典』（1697）をはしりに、モレリの『歴史大辞典』（1674）、ネル･ショメルの『農業経済辞典』（1709）、『トレヴー辞典』（1704）、サヴァリ＝デブリュスロンの『総合商業辞典』（1723-1730）、（以上フランス）やブルッカーの『哲学の批判的歴史』（1724-1744）（ドイツ）などにみることができる。しかし、先頭を走ったのはイギリスであって、Ｊ．ハリス『技術用語辞典』（1704-1710）、Ｔ．ダイチ『新総合英語辞典』（1737）、Ｅ．チェインバーズ『サイクロペディア』（1728-1742）などが刊行された。これらは大陸のものよりもはるかに実用的であり、大きな成功を収めた。

イギリスの動向に刺激されて、フランスの出版者ル・ブルトンは、チェインバーズ編纂の『サイクロペディア』（1728）の翻訳を企画した。しかし、編集を依頼されたディドロは、ダランベールを共同編集者にむかえ、多数の啓蒙的知識人を結集して、チェインバーズを超え、大陸の百科事典の水準を一新する、独自の新しい辞典、『百科全書（アンシクロペディ）』を作ることを決意し、実行に移した。無神論や理神論の傾向、あるいは実学的傾向を備える『百科全書』の刊行は、カトリックと専制権力の強固なフランスでは旧勢力に対する知的全面戦争を意味した。さらに、当時フランスの啓蒙思想家たちは、啓蒙主流からルソーが絶縁するという思想的危機のなかにあった。ディドロの試みはフランス啓蒙思想の再結集のための苦闘でもあった。

1751年7月、第1巻が刊行された。1752年１月の第２巻刊行時に既刊本の配布停止命令がだされるなど、すぐに体制による厳しい弾圧が始まった。しかし、予約講読という方法によって、1757年までに第７巻までが刊行された。1759年３月には全面的発禁命令が出され、ダランベールは編集者を辞任するが、ディドロは戦略をねりなおす。秘密裏に続巻の編集をすすめながら、1762年から、『百科全書』の図版刊行という新形式を編み出していった。遂に、1766年には本体の残る全10巻がスイスの書店発行という体裁で刊行され、図版も全11巻の刊行を1772年に終えた。執筆者は200人以上にのぼり、購読者は教

養ある都市の市民層を中心に4000人におよんだ。

『百科全書』の影響力は圧倒的であった。すぐに、パリの出版者パンクークは『百科全書　補遺』の刊行を計画した。ディドロは編集を退いたが、Ｊ．Ｂ．ロビネの活躍もあり、1776-80年に本文全４巻、図版１巻、索引全２巻を発行した。さらに、パンクークは『系統的百科事典』を企画し、1782年に「趣意書」をだし、「技芸と工芸」部門を刊行した。これは一例にすぎず、ディドロの『百科全書』に直接間接に結びつき、ヨーロッパ全体で各種の『百科全書』の刊行が活性化した。それは、そのまま、今や私たちの不可欠な知的環境となった現代の百科事典に連なっている。

名古屋大学附属図書館はヨーロッパ近代思想の原典の充実したコレクションを有している。「イギリス近代思想史原典コレクション」（通称「ホッブズ・コレクション」、1979、80年度購入）はすでによく知られている。1987年度には、「18世紀フランス自由思想家コレクション」が、1991年度には「言語哲学コレクション」が購入された。「18世紀フランス自由思想家コレクション」はフランス唯物論者の著作を中心とするもので、『百科全書』と思想的密接な関係にある。「ホッブズ・コレクション」、「言語哲学コレクション」にも18世紀フランスの重要な著作が含まれている。さらに、本学図書館は『百科全書』~~初版~~２セットを持ち、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』やチェインバーズの『サイクロペディア』も初版を収蔵している。

今回の展示会は、名古屋大学が所蔵するヨーロッパ近代思想の著作群を紹介するもので、その特色を生かすために、『百科全書』を中心に据え、原則として18世紀の刊本によって構成することとする。まず、『百科全書』と関連する著作――先行したり、同時代であったり、後続するもので『百科全書』との密接な影響関係にある著作――を展示し、つぎに、『百科全書』の執筆者たちが個人として残した著作を展示する。執筆者については、ディドロ編集の『百科全書』本編と、彼の手を離れた『百科全書　補遺』とを区別し、両方にかかわっている執筆者については本編の側に分類した。なお、以下の解説では、著者はアルファベット順に配列し、同じ著者の複数の著作については初版出版年順を基本とした。ただし、一部出版年について議論のあるものもある。(An/I)

Ⅰ.『百科全書』と影響関係にある百科事典など

１.『百科全書　学問・技芸・工芸の合理的辞典』＜写真１＞、『同　補遺』、『学問・技芸・工芸についての図版集』＜写真２-４＞、『同　補遺』、『百科全書および同補遺に含まれる事項の分析的・合理的索引』

Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une societé de gens de lettres. Mis en orde & publié par M. Diderot ... & quant à la Partie mathématique, par M. d ’Alembert. A Paris, chez Briasson..., 1751-65. 17 v. ill., 40 cm. (Fol.)

--Recueil de planches, sur les sciences, les arts libéraux, et les arts méchaniques, avec leur explications. [Tom. 1-11] A Paris, chez Briasson, 1762-72. 11 v. ill., 40 cm. (Fol.)

--Supplément à l ’Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une par une société de gens de lettres. A Amsterdam, chez M. M. Rey, 1776-77. 4 v. fold. Tables, 40 cm. (Fol.)

--Suite de Recueil des planches,... A Paris, chez Panchoucke, Stoupe, Brunet, 1777. 1 v. fold. Plates, 40 cm. (Fol.)

--Table analytique et raisonnée des matieres contenues dans les XXXIII volumes in-folio du Dictionnaire des sciences, des arts et des métiers et dans son supplément.... Tome 1-2. A Paris, Panckoucke ; A Amsterdam, chez Marc. Michel Rey, 1780. 2 v. fold. Plates. 40 cm. (Fol.)（中央・貴　035||En）

「序論」でダランベールは２つの目的を掲げている。「人間知識の順序と連関を明示すること」、「学問・技芸・工芸の合理的辞典として一般的原理と本質的細目を含むこと」。

チェインバーズの『百科事典』（1728）の翻訳から事ははじまり、1750年、ディドロは「趣意書」を発表、毎年２巻刊行し予約制とした。200名以上の執筆者を動員し、本巻17巻、図版11巻が完成したのは1772年である。それでも、教会側の反撃、官憲の発禁命令に屈せず完成できたのは、ひとえにディドロの志の高さと執念に負う。第５巻の一項目「百科全書」でディドロ自ら語っている。「われわれの子孫がより多くの知識を獲得すると同時に、より有徳でより幸福になるようにし、またわれわれ自身が人類にふさわしいことをなしおえたのちに死んでいくようにしたい。」と。

『百科全書』本編・図版集の成功を受けて、パリの出版者パンクークらが、本編の補遺４巻と図版集の補遺１巻を刊行しているが、『百科全書』の編集に精力を使い果したディドロは、協力の依頼を拒んだ。パンクークは、その後も1780年に２巻本の索引も刊行している。(K)

１-１『百科全書　学問・技芸・工芸の合理的辞典』第１巻より「人間知識の系統図」

これはベーコンの学問の分類法に多くを負っている。ディドロが作成し、ダランベールが「序論」につけ加えた。「百科全書（アンシクロペディ）」とはギリシャ語で「諸学の連関」である。「知識」は「記憶」「理性」「想像」という３つの頭脳作用から成る。要め石は「悟性」である。「記憶」からは「歴史」、「理性」からは「哲学」、「想像」からは「芸術」が派生する。さらに「歴史」は「神の歴史」「人間の歴史」「自然の歴史」と細分化される。他の２つも同様に細分化され、その１つ１つに項目を振り分けていく。これらの中で、ディドロが最も力を入れたのが「自然の歴史」の中の「技芸」の部門である。この「技芸」が「図版」と相互交流する構成になっている。(K)

１-２『学問・技芸・工芸についての図版集』第１巻より「日本文字」　＜写真２＞

『百科全書』はヨーロッパ以外の文化への多くの言及を含んでいる。日本についても、ディドロ執筆の「日本人の哲学」、ジョクール（Louis de Jaucourt）執筆の「日本」をはじめとして多くの項目で言及され、その数は60以上になると言われる。この「日本文字」の図版の解説では、日本語にはヒラガナ、カタカナ、ヤマトカナの「３種のアルファベット」があり、ヤマトカナは「内裏」でしか用いられなかった、などと述べられている。(I)

１-３　同　第２巻より「外科学」　＜写真３＞

当時は種痘の接種の是非が激しく争われていた時代であった。医学の世界で外科的治療と外科医の位置はまだきわめて低く、伝統的医学との間で論争が続いていた。しかし、その中で、人体の解剖学的探求が、止められない勢いで発展し、外科的手術が盛んに行われ成功するようになっていった。つまり、外科医の戦いは、神学と旧主的精神に対する、理性と経験論の戦いの主戦場の一つであった。外科医は18世紀自然科学の発展に決定的な役割を果たした。『百科全書』は多くの外科医

の協力をえて、当時の人体の科学の最先端の状況を示してくれている。(An)

１-４　同　第６巻より　「オランウータンとテナガザル」＜写真４＞

「博物学」の図版集より「動物界－猿類」に含まれる図版。「博物学」関係の図版数はビュフォンの『博物誌』に比べるとずっと少ない。緒言によると、図版は可能な限り実物から描き、実物を見ることができない場合は、すでにある最もよい図版に頼ったという。「四足獣」（ふつう哺乳類を指す）の図版のほとんどは「それ以上よいものを見つけることも作ることもできない」という理由で『博物誌』から「引いた」とされている。(I)

１-５　同　第６巻より「ワニ、ワニの卵、シャム・トカゲ」

「博物学」の図版集より「動物界－爬虫類と蛇類」に含まれる図版。解説によると、爬虫類は蛇類、トカゲ類、カメ類を含み、ワニ（crocodile）はトカゲ類の最大のものである。図版下部は大型のシャムのトカゲとされている。(I)

２．ベール　『歴史批評辞典』　＜写真５＞

Bayle, Pierre, 1647-1706

Dictionaire historique et critique,... 3e ed., revue, corrigée, et augmentée par l ’auteur. Tome 1-4. A Rotterdam, Chez Michel Bohm, 1720. 4 v. 42 cm. (Fol.)（中央・貴　280. 33||B）

ベールはフランスからオランダに亡命して活動したプロテスタントの思想家。近年の研究によると、彼は信仰絶対論にもとづくプロテスタント保守派の論客でありながら、その宗教的寛容の主張、宗教からの道徳の独立の主張などが歴史的状況を越えた普遍性を持っていたことから、結果的に啓蒙思想の形成に大きな影響を与えることになった。『歴史批評辞典』（初版1696）は先行する歴史事典の誤りを正す目的で著された大著。この書はまた古今の思想に対するするどい批判を含んでいたため、教会からは反宗教書と見なされ、他方、百科全書派によって自分たちの主張のために利用された。この辞典の「スピノザ」の項は『百科全書』にそのまま借用された。(I)

３．『総合歴史事典』　＜写真６＞

Allgemeines historisches Lexicon, in welchem das Leben und die Thaten derer Partiarchen, Propheten, Apostel, Väter der ersten Kirchen, Päbste, Cardinäle, Bischöffe, Prälaten, vornehmer Gottes=Gelahr nebst denen Ketzern ; ... Theil 1-4. Andere und vermehrte Auflage. Leipzig, Verlag Thomas Fritsch, 1722. 4 v. 39 cm. (Fol.)（情報・言語 192. 033||Al）

初版は3巻、ライプツィヒ、1709年。補遺１巻　1714年。1722年第２版（展示）。1703-40年第３版。同地のトーマス・フリッチュによる出版。「ライプツィヒ事典（Leipziger Lexikon）」の名で呼ばれた。タイトルページのつぎに神聖ローマ帝国皇帝カール６世の勅許を掲げる。これは向こう５年間の専売権の保障である。長いタイトルページで本事典の扱う３つのカテゴリーが挙げられる。

１）聖界（法王、予言者、教父、「及び異端者」など）、世俗界（皇帝、王、諸候など）の人物、学者・詩人・芸術家の事蹟。
２）著名貴族、諸教団、「異教」の神々。
３）諸国、地方、島、都市、城、修道院、山岳、河川、等々「についての詳細な記述」を「アルファベット順に」扱っている、と謳う。序言で、ベール歴史批評辞典の項目はすべて取り入れた、とも述べられている。(Ar)

４．チェインバーズ　『学芸・科学百科事典（サイクロペディア）』　＜写真７＞

Chambers, Ephraim, ca. 1680-1740

Cyclopædia : or, an Universal Dictionary of Arts and Sciences. London, Printed for James and John Knapton, et al., 1728. 2 v. ill., 42 cm. (Fol.)（中央・貴　033||C）

イフレイム・チェインバーズが編纂し、1728年に２巻本として出版された百科事典である。フランスの『百科全書』が登場する以前には学芸・科学に関する最も包括的な百科事典として知られており、『百科全書』の構想も『サイクロペディア』のフランス語版を翻訳・出版するという計画から生まれた。巻頭の「序文」では、『学問の進歩』において学問の体系化を試みたフランシス・ベ

イコンのように人類の知識全体を精密に分類しており、この事典が単なる知識の寄せ集めではなく体系的な構想のもとに編集されたことを示している。タイトルページには、チェインバーズの師匠でもあった地図製作者ジョン・シーネックス（John Senex）のほかに、ロングマン社の創立者トマス・ロングマン（Thomas Longman）などの名前が見える。『サイクロペディア』の出版は高い評価を得て、チェインバーズは1729年にイギリス王立協会会員に選ばれている。展示書は、1728年初版である。(Y)

５.『ツェドラー大百科事典』（初版のリプリント版）

Zedler, Johann Heinrich

Grosses vollständiges Universal-Lexicon. 2., vollständiger photomechanischer Nachdruck. Bd. 1-64. Suppl. 1-4. Graz, Austria, Akademische Druck u. Verlagsanstalt, 1993-99. 68 v. ill., 26 cm.（中央・参　034||Z）

オリジナルは、1732-50年にハレ（Halle）で出版された。Grosses vollständiges Universal Lexicon aller Wissenschaften und Künste ... と続く長いタイトルはこの時代特有のものである。「学術・芸術万般大完全百科事典」。ツェドラーはライプツィヒ（ザクセン領）の出版者であるが、出版にさいして、同地で同じく百科事典をてがけていた同業者フリッチュ（展示品参照）から異議があり、ハレ（プロイセン領）で出版されることになったものという。総編集責任者ゴットシェート（Johann Christoph Gottsched）のもと、各分野の責任を持つ９人の編集者が多くの学者の協力を得て完成させた。全64巻は当時世界最大規模。補遺は４巻までで中断された。(Ar)

６.『フランス・ラテン汎用辞典』（トレヴー辞典）　＜写真８＞

Dictionnaire universel francois et latin, contenant la signification et la définition. Nouv. ed. corr. et considérablement augm. A Paris, par la Compaignie des Libraires associes, 1752. 7 v. 41 cm. (Fol.)（情報・言語　853||D）

トレヴー（Trevoux）はフランス南東部エン（Ain）県の小さな町。この辞書は、1704年にイエズス会がこの地で初版（四つ折り版３巻）を刊行したことから通例『トレヴー辞典（Dictionnaire de Trevoux）』と呼ばれる。初版はフュルティエール（A. Furetiere, 1619-1688）のフランス語辞典（初版1690）にバナージュ（H. Basnage de Beauval, 1656-1710）が手を加えたものを元にしているとも言われるが、その後改訂を重ね、最後の第５版は1771年に８巻にまで拡充された。フランス語に関して、すたれた語、会話体の語、技術用語などを含んだ点、また、固有名詞を含んで百科事典的性質も備えた点などが特徴であり、イエズス会の側でも貴族の言葉の規範を示すための旧来の辞書を超えるものを指向していた点は注目に値する。イエズス会は『百科全書』が自派のこの辞書から盗用をしているなどと攻撃した。(I)

７.『エンサイクロペディア・ブリタニカ』　＜写真９＞

Encyclopædia Britannica ; or, A Dictionary of Arts and Sciences, compiled upon a new plan,... by a Society of Gentlemen in Scotland. 1st ed. Edinburgh, Printed for A. Bell and C. Macfarquhar, 1771. 3 v. ill., 27 cm. (4to)（中央・貴　033||En）

『エンサイクロペディア・ブリタニカ』出版の経緯は必ずしも明確ではないが、スコットランドの銅版画師アンドルー・ベル（Andrew Bell, 1726-1809）と印刷業者コリン・マクファカー（Colin Macfarquhar, 1745頃-1793）が構想し、博物学者・翻訳者ウィリアム・スメリー（William Smellie, 1740-1795）に編集を依頼して進められたと推定されている。1768年12月に毎週１冊、100週の予定で発刊が始まり、1771年に総ページ数2,689ページ、図版160枚を含む３巻本としてエディンバラにおいて出版された。巻頭の「序文」には、チェインバーズの『サイクロペディア』とディドロの『百科全書』が言及されており、大項目主義を採用することによってこれらの百科事典を乗り越えようとした編集意図が示されている。重要な主題については長大な論文によって詳述し、さらにそれを補うかたちで小項目が加えられ、各項目の相互参照ができるように工夫されている。初版は好評をもって迎えられ、1777-84年に第２版が10巻本として、1788-98年に第３版が18巻本として刊行されるというように時代とともに発展していった。展示書は1771年初版である。(Y)

８．ビュフォン　『一般的・個別的博物誌』（王立印刷局『ビュフォン全集』版）　＜写真10＞
Buffon, Georges Louis Leclerc, comte de, 1707-1788

Histoire naturelle, générale et particulière. In : Oeuvres complètes de M. le Comte de Buffon, intendant du Jardin du Roi, de l ’Académie Francoise, de celle des sciences, etc. Tome 1. Paris, Imprimerie Royale, 1774. 1 v. 17 cm. (12mo)（文学部　402||B　部分所蔵）

ビュフォンは博物学者で、王立植物園園長。1749年から死の年まで刊行された『博物誌』（四つ折り版36巻）は畢生の大作である。『百科全書』への協力も引き受けたが、執筆しないまま次第に疎遠となった。しかし、この二つの大著は人類の知識の集成という点で軌を一にしている。また、『博物誌』の刊行の前半期の主要な協力者であったドーバントン（L. J. M. Daubenton）（特に「四足獣」の解剖学的記述に貢献）は、『百科全書』でも博物学関係項目の中心的執筆者として長短おりまぜて900 以上の項目を執筆しており、両者は人的にも重なっている。なお、展示する『博物誌』は1774年-1778年の『ビュフォン全集』版で、ドーバントンの解剖学的記述は収められていない。(I)

９．ビュフォン　『鳥類の博物誌』
Buffon, Georges Louis Leclerc, comte de, 1707-1788

Histoire naturelle des oiseaux. Tom. 3. Paris, Imprimerie Royale, 1772. 1 v. 17 cm. (12mo)（文学部　488||B　部分所蔵)

いわゆる『博物誌』は、ビュフォンの生前には、狭義の『一般的・個別的博物誌』（四つ折り版15巻、1749-1767）（主として哺乳類を扱う）、『鳥類の博物誌』（同９巻、1770-1783）、『博物誌補遺』（同７巻、1774-1789）、『鉱物の博物誌』（同５巻、1783-1788）までが刊行された。爬虫類、魚類、鯨類、さらには軟体動物、甲殻類、昆虫類、植物は弟子たちの仕事となった。展示する『鳥類の博物誌』は王立印刷局による12折りの版である。(I)

10．『文法と文学（系統的百科事典）』　＜写真11＞
Grammaire et littérature : dédiée et présentée à Monsieur le Camus de Néville ... Tome 1-3. Paris, Chez Panckoucke, libraire, hôtel de Thou, 1782. 3 v. 27 cm. (4to) (Encyclopédie méthodique, ou par ordre de matières, par une société de gens de lettres, de savants et d ’artistes : précédée d ’un vocabulaire universel, servant de table pour tout l ’ouvrage; ornée des portraits de MM. Diderot & d ’Alembert, premiers éditeurs de l ’Encyclopédie.（中央・貴　801||GENGO||035||En　部分所蔵）

『百科全書』補遺の出版元として知られるパンクーク（Charles Joseph Panckoucke, 1736-1798）が、新たに企画した主題別配列を特色とする百科事典。パンクークはまた、ヴォルテール全集などの出版、『メルキュール（Mercure de France)』、『モニトゥール（Le Moniteur universel)』など著名な定期刊行物の刊行も手がけた大物出版元であった。『系統的百科事典』は1782年に刊行を開始し、全200巻を超える大事業として50年後の娘の代に完成を見た。当初の執筆者の内には、文学者マルモンテル（J. F. Marmontel)、博物学者ドーバントン、文法学者ボゼ（N. Beauzée）など『百科全書』やその補遺の執筆者が多く名を連ねていた。(I)

Ⅱ．『百科全書』に執筆した人々とその著作

Ａ．本編の執筆者

ダランベール　Alembert, Jean Le Rond d ’, 1717-1783

ダランベールは当時著名な数学者であり、次第に哲学へと向かった。啓蒙思想家と交遊し、1747年にはディドロとともに『百科全書』の編集を引き受けた。第１巻では有名な序論を執筆し、以後数学関係をはじめ約150の項目を執筆した。1757年には「ジュネーヴ」の項で、この都市のカルヴァン派によって演劇が禁止されていることを嘆いたことから、ルソーやジュネーヴの聖職者と論争となり、ルソーが百科全書派から離れるきっかけとなった。1759年にはダランベール自身も反動派の攻撃に嫌気がさして編集者を辞任し、数学関係の項目の執筆だけを続けた。哲学的には感覚論者であり、神の存在については懐疑的でヴォルテール流の理神論も拒否した。(I)

11.『公平な著者によって書かれた、フランスにおけるイエズス会の解体について』　＜写真12＞
Sur la destruction des jésuites en France par un auteur désintéressé. [S.l. : s.n.], 1765. 187 p. 17 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||198. 25||Al）
　1764年には『百科全書』に敵対していたイエズス会が禁止されたが、こうした事態を受けて、イエズス会（ジェジュイット）とヤンセン派（ジャンセニスト）を批判的に論じた著作。『百科全書』の編集者を辞した後、意見の表明に慎重になっていたダランベールだが、宗教上の微妙な問題にあえて取り上げている。

12.『托鉢僧の組織の歴史』
Histoire de l ’établissement des moines mendiants; ou On traite de l ’origine des moines leur premiere ferveur, de leur relâchement, de leur décadence, de leurs différentes réformes jusqu ’à S. Dominique & S. François. A Avignon, Aux dépens des Libraires Associes, 1767. [vii, 9], 247, [1] p. 17 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||G）
　この著作は匿名で出版された。バルビエ（A. Barbier）の『匿名著作辞典』では、歴史家プーラン・ド・リュミナ（Etienne Joseph Poullin de Lumina, ?-1772）かダランベールの作とされているが、一般にはプーランの作と考えられているようだ。修道士の起源、托鉢修道会としてのドミニコ会とフランシスコ会の創設、発展と弛緩、彼らが教会と国家にもたらした問題について、修道会改革の立場から論じている。

ブランジェ　Boulanger, Nicolas Antoine, 1722-1759
　土木技師としての仕事を通じて博物誌、とりわけ地球の大変動に興味を持ち、人類の歴史との関係を考察した。旧約聖書の内容がこの天変地異を示していると考え、また、天変地異が人に与えた恐怖が迷信、宗教、専制政治などを生み出したと考えた。『百科全書』には自らの関心に関係する「労役（corvée）」、「洪水（déluge）」、「ゾロアスター教徒（guèbre）」の３項目を寄稿している。また、「経済（Oeconomie politique）」の項はブランジェの遺稿を利用している。彼の著作はいずれも死後に出版されたものである。また、ドルバックの著作が彼の名の下に出版された例もある。(I)

13.『東方専制政治の起源の研究』
Recherches sur l ’origine du despotisme oriental : ouvrage posthume de Mr. B. I. D. P. E. C. [Paris, s.n.], 1761. xxxii, 435, [1] p. 16 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）
　ブランジェの死後、表題にそって遺稿から選択されドルバックの手で出版された。唯物論者エルヴェシウスを弁護する匿名の手紙が序文として付けられるなど、反宗教的色彩を鮮明にした出版となった。

14.『明かされた古代』　＜写真13＞
L ’antiquité dévoilée par ses usages, ou Examen critique des principales opinions, cérémonies & institutions religieuses & politiques des différens peuples de la terre. Tome 1-3. A Amsterdam, Chez Marc Michel Rey, 1766. 3 v. 18 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）
　ブランジェの主著。作者の死後ドルバックの手で出版された。世界的な大洪水が太古の人間に恐怖を与えたことが宗教や神話を生み、専制君主の崇拝にまで至り、その影響はなお続いているとした。ブランジェの論証が脆弱であることは当時から気づかれていたが、先史学の分野での先駆的業績としてディドロらに評価された。

15.『エリアとエノクについての論考』
Dissertation sur Élie et Énoch : suivie D ’une dissertation sur les incertitudes qui concernent les premiers écrivains de l ’antiquité, & d ’un traité mathématique sur le bonheur. En Suisse, De l ’Imprim. philosophique, 1791. (Œuvres de Boulanger, t. 6). 335, [1] p. 15 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）
　ブランジェは非キリスト教の神話をもとに、あらゆる民族の神話には来世への希望、偉大な裁き手の降下、最後の審判の３つのテーマが見いだされると主張し、旧約聖書列王紀のエリアについての物語と創世記のエノクについての記述もここに還元し、聖書を神話の一つと見なしている。比較

神話学の先駆とも見なしうるが、聖書の記述の分析が粗削りに過ぎることは否めない。

16.『統治についての哲学的試論』
Essai philosophique sur le gouvernement, où l ʼon prouve l ʼinfluence de la religion sur la politique. En Suisse, De l ʼImprim. philosophique, 1791. (Œuvres de Boulanger ; t. 10). 320 p. 15 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）
　この著作はそのまま『百科全書』に「経済（Oeconomie politique）」の項として収められた。社会の起源に宗教が関与したことやその後の社会の推移が論じられる。また、ブランジェが穏当な君主政治を評価していたことがうかがえる。なお、『百科全書』にはルソーが執筆した綴りの異なる「経済（Economie）」の項がすでにあったが、ディドロはあえてルソーの項に対抗させるように後の巻にこの項目を加えている。

ド・ブロス　Brosses, Charles de, 1709-1777
　有能な司法官としてディジョンの高等法院の議長を勤めたが、独立不羈の人でもあった。ローマ史研究に導かれて行ったイタリア旅行（1739-1740）のノートを元に執筆された『イタリア書簡（Lettres sur l ʼItalie）』（死後出版、1799）はするどい洞察や生彩に富む文体を高く評価されている。考古学をはじめ多方面の著作を著した（『ヘルクラネウムについての書簡（Lettre sur Herculanum）』1750、『南大陸への航海の歴史（Histoire des navigations aux terres australes）』1756、『物神崇拝について（Du Culte des dieux fétiches）』1760など）。「哲学者たち」の唯物論的傾向を批判するなどして、ヴォルテールと対立した。『百科全書』には「音階 gamme」の一項目を寄稿している。(I)

17.『言語の機械的形成と語源の身体的要因を論ず』
Traité de la formation méchanique des langues, et des principes physiques de l ʼétymologie. t. 1-2. A Paris, Chez Saillant ; Chez Vincent ; Chez Desaint, 1765. 2 v. 18 cm. (12mo)（中央・貴　801||GENGO||801||B）
　ド・ブロスの代表的著作で言語の起源を論じたもの。発声器官の機能から音声の特質に言及し、他方、擬音語・擬態語から発して言語の形成をあとづけている。語源学などの分野で高く評価された。また、この著作に先立って碑文・文芸アカデミーで発表された語源についての２論文は『百科全書』の「語源（etymologie）」の項で利用された。

ディドロ　Diderot, Denis, 1713-1784
　シャンパーニュ州ラングル生まれ。パリに上り神学研究を志すが、次第に信仰から外れ、唯物論に傾く。無神論哲学を中心に、文学、芸術から社会論にいたるまで、啓蒙思想をリードする著作を次々と生み出した。組織者としても、ダランベールを協力者として『百科全書』の刊行を完遂し、理論と活動の両側面においてフランス啓蒙思想の代表者であった。さらに、ヨーロッパ諸国に広く購読されていたグリムの『文芸通信』でも論陣をはり、ディドロの影響力はフランスを越え広くヨーロッパを駈けめぐった。ロシアのエカチェリーナ二世より年金を支給され、1773-74年にはロシアを訪問している。(An)

18.『哲学断想』　＜写真14＞
Pensées philosophiques. A Londres, Chez Porphyre..., 1757. [4], viij, 85, [11] p., [1] leaf of plates, 11 cm. (16mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||D）
　『哲学断想』の初出は1746年であり、ヴォルテールの『哲学書簡』の批判精神を継承し、パスカルの『パンセ』のようなキリスト教的世界観を批判しようとした。自然宗教の優位を皮肉な口調で説き、発行後すぐに、高等法院により焚書の判決を受けた。

19.『公教育について』
De l ʼéducations publique. A Amsterdam, [s.n.], 1762. xx, 235, [1] p. 17 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||D）
　著者不明。ディドロ説もある。匿名で出版された。教育の責任者として世俗国家を教会より上位に位置付け、ラ・シャロッテの『国民教育論』（1763）などに大きな影響を与えた。ディドロの公

教育による教育の機会均等の思想に通じる主張である。

20.『自然法典概説』

Abrégé du code de la nature. In : Système de la nature, ou Les loix du monde physique, & du monde moral par M. Mirabaud. 2e partie. A Londres, [s.n.], 1770. 1 v. 17 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）

ドルバックの『自然の体系』に付け加えられた。ディドロは『自然の解釈に関する断想』（1753）で、思弁哲学がおわり、自然科学と実験哲学の時代が到来すると主張した。その姿勢は終生変わらず、ここでも、ドルバック流の唯物論的合理主義による自然論の側にたっている。

21.『宗教についての考察』

Pensées sur la religion. In : Recueil philosophique ou mêlange de pieces sur la religion & la morale. Par différentes auteurs. Tome 2nd. Londres [i.e. Amsterdam : M.-M. Rey], 1770. Publie par J.-A. Naigeon. [4], 253, [1] p. 17 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||160. 4||R）

ディドロは、『哲学断想』以来、おりに触れて、理性と合理主義の立場から宗教的迷信と狂信とを告発した。哲学者の抜粋集をだすことは、旧思想批判のために有効でよくとられた戦略であったが、それにディドロは不可欠であったろう。

デュマルセ　Dumarsais, César Chesneau, 1676-1756

デュマルセはオラトリオ会で学び、そこに属したが、25歳で自ら会を離れた。弁護士の資格を得るが、結局、家庭教師として生計を立てた。フォントネルを師および友とし、ロックの哲学を信奉し、カトリック批判の立場をとった。無神論者であったと言われる。文法家として『ラテン語の論理的学習法（Exposition d ’un méthode raisonnée pour apprendre la langue latine）』（1722）、『比喩論（Traité des tropes）』（1730）を出版するが、当時は評価されなかった。晩年になってもドルバック、ディドロらの年下の自由思想家たちと交遊した。『百科全書』の文法関係の諸項目の執筆を任され、最初の７巻に140 ほどの項目を執筆している。(I)

22.『比喩論』　新版

Traité des tropes : pour servir d ’introduction à la rhétorique et à la logique. Nouvelle édition publiée par Mr. Formey. A Leipsic, Chez la Veuve Gaspard Fritsch, 1757. [12], 274, [2] p. 19 cm. (8vo)（中央・貴　801||GENGO||852||D）

感覚的対象はさまざまな状況を伴って与えられるので、私たちはしばしば状況を示す観念によって当の対象を示すことができる。この付随的な観念は想像力によりよく訴えることがあり、そこから比喩が生まれるとされる。ここにはロックの観念連関説の影響を見ることができよう。こうした原理的考察の上に、この書では各種の比喩がラテン語やフランス語の文例を挙げて詳細に検討されている。1730年初版。

23.『哲学者』

Le philosophe. In : Nouvelles Libertés de penser. A Amsterdam, [s.n.], 1743. [4], 3-204, [2] p. 14 cm. (18mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||F）

デュマルセの自由思想家としての著作。自由思想関係の「選集」に収められて読まれた。18世紀の知識人の理想としての「哲学者」を、経験・観察を重視し、理性に基づいて社会に積極的に関わる者として定立した。この書の内容は後に『百科全書』の「哲学者」の項で利用されるが、この項はヴォルテールの執筆であると言われている。名古屋大学附属図書館にはこの著作を収めた３種類の「自由思想選集」が所蔵されている。

24.『著作集』

OEuvres de Du Marsais. A Paris, De l ’imprimerie de Pougin, 1797, an 5. 7 v. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||D）

初版1730年。デュマルセの多くの文法関係の著作を中心としながら、反宗教的文書も収録している。後者の内には、現在ではデュマルセの著作ではないと考えられている作品も含まれている。

フォルボネ　Forbonnais, François Véron Duverger de, 1722-1800
　フランスのル・マンに生まれ、1740年代末にパリに出て、グルネなど当時最高のエコノミストと親交を結んだ。農産物と加工品をともに発展させる国民経済を構想し、論陣をはった。英仏の経済的対抗関係のなかで、フランスの国内の自由を保護する基本的条件として、貿易差額のプラス維持を説いた。主著は『商業要論』（全２巻1754）。(An)

25.『1595年より1721年にいたるフランスの財政に関する研究と省察』
Recherches et considérations sur les finances de France, dupuis l ’année 1595 jusqu ’a l ’anne 1721. Tome 1-2. A Basle, Aux dépens des Freres Cramer, 1758. 2 v. 26 cm. (4to)（経済学部　Rare||342. 35||F39||1-2）
　本書はフランス財政の歴史的考察を展開していて、貿易差額論を軸とするフランス財政再建論者フォルボネの政策提言の根拠を示すものとなっている。

グリム　Grimm, Friedrich Melchior, Freiherr von, 1723-1807
　ドイツの文芸評論家。ライプチヒ大学に学んだ。1749年よりパリで生活し、ヴォルテールやディドロと親交を結んだ。フランス文芸に関する批評を多く書いた。『文芸通信』を定期的に発行し、主として北欧の王侯たちを購読者として確保し、パリの最新の思想状況を手際よく伝えた。啓蒙思想のヨーロッパ全体での交流と普及へのその貢献は計り知れないものであった。1790年に帰国し、ロシア公使としてハンブルクに赴任したりしたが、最後はゴータで死去した。作品は多彩で、ヨーロッパ18世紀文芸思想のすべてにめくばりがなされているといってもよい。作品は、後に、『文芸哲学批評通信』全16巻（1877-82）にまとめられた。(An)

26.『歴史・文学・逸話回想録』
Mémoires historiques, littéraires et anecdotiques, ou correspondance philosophique et critique, adressée au Duc de Saxe Gotha, depuis 1753 jusqu ’en 1792 [i.e. 1790] par Le Baron de Grimm, et par Diderot. Londres, chez Colburn, 1813-14. 7 v. 21 cm. (8vo)（経済学部　Rare||363. 028||G86||1-7）
　グリムの文芸批評集の一つ。多彩な領域を、簡潔的確に論評して、グリムの批評眼の高さを教えてくれる。

ドルバック　Holbach, Paul Henri Thiry, baron d ’, 1723-1789
　ドイツ生まれ。パリとオランダのライデンに学び、フランスに帰化し、1753年に叔父の財産を相続し、男爵の身分をえた。パリとグランヴィルの邸宅をサロンとして啓蒙思想家に解放し、フランスの無神論や唯物論の思想の発展に尽くした。ディドロは「鉱物学、冶金学、物理学に精通し、ドイツ語を母国語とする人」と『百科全書』に紹介している。その『百科全書』にドルバックは、400にも及ぶ自然科学に関する項目を執筆した。無神論と合理主義にたって、宗教と政治的専制を激烈に批判する著作を書いたが、いつも禁書処分を受けた。しかし、ドルバックは、匿名だけでなく、すでに世を去った思想家の名前をもちいるなど、戦術を駆使し、非合法=地下出版によって対抗した。革命勃発の直前にパリで死去。(An)

27.『キリスト教暴露』
Le christianisme dévoilé, ou Examen des principes et des effets de la religion chrétienne par feu M. Boulanger [pseud.]. A Londres [Nancy, Leclere], [s.n.], MDCCLVI[i.e. 1761]. [2], ij, xxviij, 295 p. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）
　人間の利己心を擁護し、キリスト教的禁欲主義を排撃。弾圧を見越して、初版については、出版の年も場所も偽装されたもので、著者もすでに死去していた N. A. ブランジェを暗示させるようにしてあった。実際、1794年版の『ブランジェ著作集』に収録されてもいる。初版は1761年パリ説が有力。

28.『偏見の起源に関する哲学的手紙』
Lettres philosophiques sur l ’origine des préjugés, du dogme de l ’immortalité de l ’âme, de l ’idolâtrie de la superstition; sur le systême de Spinosa sur l ’origine du mouvement dans la matiere, traduites de l ’anglois de

J. Toland. A Londres, [s.n.], 1768. [2], II, 267 p. 16 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 2||T）
　イギリスの自由思想家トランド（J. Toland, 1670-1722）の『セリーナへの手紙』（1704）の自由訳。理性に理解可能な側面でのみキリスト教を認めるという理神論の観点から、宗教的偏見を批判した著作であった。

29.『携帯神学』
Théologie portative, ou Dictionnaire abrégé de la religion chrêtienne par Mr. l ’abbé Bernier.... Londres, [s.n.], 1770. 166 p. 19 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）
　ドルバックによる非合法秘密出版のうちの一冊。ベルニエ神父の作品と偽って発行された。『携帯神学』の題名のように、とっつきやすい話題について神学を皮肉っている。多くの版がだされ、そのつど編集者や別の著者によって増補された。

30.『神聖感染』
La contagion sacrée, ou Histoire naturelle de la surpersitition. Ouverage traduit de l ’anglois. Tome 1-2. Londres, [s.n.], 1768. 2 v. in l. 16 cm. (12mo)（中央・貴　Hobbes Collection III　147||H）
　ドルバック非合法出版の一冊。イギリスの無神論者トレンチャードのフランス訳と偽ってある。「神聖感染」を吟味し、歴史的にみて、超自然的宗教は無益で危険で邪悪であることは明らかであり、人間と社会に有益な自然的信念の体系が取って代る時がきたと説く。

31.『ウジェニーへの手紙』
Lettres à Eugénie, ou Préservatif contre les préjugés. Tome 1er-2nd. A Londres, [s.n.], 1768. 2 v. 17 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）
　ドルバック非合法地下出版の一冊。あるエピキュロス主義者の著作ということにしてある。現世の幸福の大切さをとき、キリスト教を地上の生活を嫌悪させ天国への期待のみに人間を追い込む反道徳として攻撃。

32.『イエス・キリストについての批判的歴史』
Histoire critique de Jésus-Christ, ou Analyse raisonnée des Evangiles : Ecce homo. [S.l., s.n., 17–] xxxii, 326 p. 20 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）
　ドルバックによる非合法秘密出版の一冊。初版は1770年。「福音書は良識のある人間には不愉快な東洋風の小説にすぎない。」「無学で無教養な四人の男が」イエス・キリストの伝記を書いたのだ。福音書の矛盾と非合理を縦横無尽に暴こうという驚愕の書。

33.『聖人列伝』
Tableau des saints, ou examen de l ’esprit, de la conduite des maximes du mérite des personnages que le christianisme révere propose pour modeles. Tome 1er-2nd. Londres, [s.n.], 1770. 2 v. in 1. 16 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）
　キリスト教攻撃のために、ドルバックが非合法地下出版したもののうちの一冊。モーセを代表とする旧約聖書の聖人から新約聖書の聖人に、さらには同時代の代表的護教者にいたるまで、キリスト教史の英雄を自由に取り上げ厳しく批判している。

34.『偏見について』
Essai sur les préjugés, ou, De l ’influence des opinions sur les mœurs & sur le bonheur des hommes : ouverage contenant l ’apologie de la philosophie par Mr. D. M. Londres, [s.n.], 1770. [4], 394, [2] p. 16 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）
　弾圧対策として、匿名や他の哲学者の名前を使うのはドルバックの常套手段。これもデュマルセの哲学的著作という体裁で発行されたドルバックの著作とされ、偏見の人間に対する害悪を告発している。政府の啓蒙的役割を軽視していると、プロイセンのフレデリック大王はヴォルテールに不満を書き送った。

35.『自然の体系』　＜写真15＞

Systême de la nature, ou des loix du monde physique du monde moral, par M. Mirabeaud. 1ere - 2e partie. Londres, [s.n.], 1770. 2 v. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）

ミラボーの名で刊行されたドルバックの主著。内容的に、自然論、人間論、無神論の三つの部分により構成され、人間の自然的欲求を擁護し宗教を批判した。1770年8月、パリ高等法院によって断罪され、急進的なドルバックを擁護するか否かをめぐって啓蒙思想家に大きな亀裂が生じた。

36.『良識または自然の諸観念』

Le bon-sens, ou idées naturelles opposées aux idées surnaturelles. Londres, [s.n.], 1772. XII, 276 p. 19 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）

内容的には、『自然の体系』を簡略化し読みやすくしたもの。そのためか、25版以上をかさね、イギリス、ドイツ、イタリア、スペインなど各国語に訳された。時に、ジャン・メリエ神父の名のもとに刊行され、ヴォルテールの序文をつけ、敬虔な神父が死に臨んでキリスト教を非難した遺書だと宣伝された。

37.『自然政治学』

La politique naturelle, ou Discours sur les vrais principes du gouvernement par un ancien magistrat. Tome 1er-2nd. Londres, [s.n.], 1773. 2 v. 20 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）

ドルバック『自然の体系』の政治の世界への展開。ドルバックは、各個人の自由と財産の保護を基本に据え、「社会契約」の観念を導入して自由な政治体制を提示しようとした。革命の権利も承認したが、それを実行に移すことは有害であると考えられていた。

38.『社会の体系』

Systême social, ou Principes naturels de la morale et de la politique. Avec un examen de l ’influence du gouvernement sur les moeurs. Tome 1er - 3e. Londres, [s.n.], 1773. 3 v. 19 cm. (8vo)（中央・貴 135||ZIYUSISO ||135. 3||H）

『自然の体系』の原理にたって社会体系を構想したドルバックの著作。人間の行動原理は自己保存と幸福の追求にあり、道徳はそこから引き出される。自然界のシステムが引力の法則によっているように、快楽を求め苦痛を避けるという人間同士の接近と反発から社会というシステムが構成される。だから、天上から道徳を導くキリスト教が道徳を腐敗させる。

39.『エトクラシー（神聖支配）』

Éthocratie, ou Le gouvernement fondé sur la morale. A Amsterdam, chez Marc-Michel Rey, 1776. [12], 293, [3] p. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||H）

ドルバック最後の著作。ルイ16世の改革に期待して、憲法の制定、思想の自由、貴族的領主特権の廃止などによるフランス社会の近代化案を提言している。商業的富を基礎にしながら、そこに生じる不平等を公民の徳の育成によって是正する政治体制が、ドルバックのエトクラシーであった。

マルゼルブ　Malesherbes, Chrétien Guillaume de Lamoignon de, 1721-1794

マルゼルブは『百科全書』の執筆者ではないが、王政の側で『百科全書』を擁護した代表的人物である。司法官僚としてパリ高等法院評定官、次いで租税法院長となり、図書監督局長も兼務した。王政内の進歩派として検閲制度の弾力的運用を行い、『百科全書』の刊行に便宜を図った。その後は、反動派と戦いながら内務大臣、国務大臣などを務めた。革命下には国民公会で国王の弁護をし、やがて自らも逮捕され、処刑された。『百科全書』の項目や執筆者の選定について、ディドロは親しくマルゼルブと連絡を保ち、その意見を入れて最終決定を行っていたとされる。文芸を好み、1775年以来アカデミー・フランセーズの会員でもあった。(I)

40.『プロテスタントの結婚についての論考』

Mémoire sur le mariage des protestans. [S.l., s.n.], 1787. 171, [1], 44 p. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||198. 3||B）

マルゼルブは1787年から88年かけて国務大臣を務め、プロテスタントに戸籍（tat civil）を認めることに寄与した。この著作はその際にまとめられた。当時、国民の大半を占めるカトリック信者の出生、結婚、死亡はカトリック教会によって管理されていたが、プロテスタントを始めとする非カトリックの人たちの動向をいかに把握すべきかが語られている。関連するマルゼルブの国務会議における演説なども同時に収められている。

マルモンテル　Marmontel, Jean François, 1723-1799

文学者。雑誌に発表した短編小説をまとめた『道徳短編集（Contes moraux）』（1761）で知られる。『百科全書』ではC-Gの部分の文学関係項目、補遺では全体にわたって100以上の文学関係項目を執筆した。この仕事はそれぞれ『フランス詩学（Poétique francaise）』２巻（1763）、『文学原理（Eléments de littérature）』６巻（1787）へと発展した。理性を中心に据える古典主義芸術論を継承する一方、デュボス（Dubos）を先駆者とする経験主義・相対主義の芸術論をも受け継いだ。(I)

41.『ソクラテスの弟子からアテネ市民への書簡詩』　＜写真16＞

Un disciple de Socrate, aux athéniens. Héroide. A Athénes, Olymp, XCV, an 1 [1792 or 1793]. 15, [1] p. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||952. 59||M）

マルモンテル作とされる韻文詩で、アテナイ人にソクラテスを死に至らしめた過ちを繰り返すなと呼びかけたもの。

モンテスキュー　Montesquieu, Charles de Secondat, baron de, 1689-1755

ボルドーの貴族の生まれ。高等法院の裁判官となる。『ペルシャ人の手紙』（1721）で摂政時代（1715-1723）の世相を諷刺し一躍有名となる。高等法院－すなわち司法－の立場を弁護している点は見逃せない。『ローマ人盛衰論』（1734）ではローマが共和制をやめた時点で衰亡していくと考えた。ヴォルテールやギボンの「ローマ史」とはこの点で異なる。『法の精神』（1747）が主著である。序文に「瞬時の渉猟をもって二十年心血の労作を批判するなかれ」と言う。これでは解題が書けない。第11篇６章「イギリスの国家構造について」が後、「三権分立の父」の神話を生んだ。ディドロらからは大家と尊敬されていたが『百科全書』には「趣味」の一文を寄稿したのみ。死が真近だった。(K)

42.『モンテスキュー著作集』　＜写真17＞

Œuvres de Montesquieu. Tome 1er-5e. Nouvelle édition, plus correcte et plus complette que toutes les précédentes. A Paris, chez Jean-François Bastien, 1788. 5 v. maps, port., 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||954. 52||M）

革命前夜のパリで出版された「選集」。当時よく読まれた主要な著作や論文を集めて出版したもの。『わが思索』や書簡などは収録されていない。

ネジョン　Naigeon, Jacques-André, 1738-1810

ネジョンはドルバックとともにはっきり無神論をとなえた数少ない思想家の一人。ディドロの弟子であり、熱心な崇拝者だった。数多くのドルバックの反宗教文書をオランダで出版した。『百科全書』には“Unitaires”など３つの項目を寄稿したにすぎない。後のテーマ別編集の『系統的百科事典』では『古今の哲学（Philosophie ancienne et moderne）』３巻（1791-1794）を執筆している。この書は強い反カトリック、無神論の立場から書かれている。また、ディドロ自身から草稿の提供を受けて初めてのディドロ著作集の編纂を進め、1798年にこれを刊行した。ナポレオン時代のカトリック復活の流れの中では沈黙し、1810年ほとんど忘れられて世を去った。(I)

43.『信条や出版の自由についての国民議会への請願書』

Adresse à l'assemblée nationale sur la liberté des opinions, sur celle de la presse, etc., ou Examen philosphique de ces questions.... A Paris, chez Volland, 1790. [4], 140 p. 22 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||235. 06||N）

フランス革命下、国民議会に宛てられた請願書。信条・信教・出版の無条件の自由を主張し、き

わめて進歩的な内容となっている。しかし、ネジョンはその後の革命の進展には何の役割も果たすことはなかった。個人的にはロベスピエールが「最高存在」の崇拝を打ち立てたことを嘆いたと言われる。

44.『ディドロの生涯と著作についての年代順哲学的回想録』　＜写真18＞

Mémoires historiques et philosophiques sur la vie et les ouvrages de D. Diderot. Paris, chez J. L. J. Brière, 1821. viii, 432 p. port. 22 cm.（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||N）

この書はネジョンの死後、1821年になって刊行された。『古今の哲学』とともに、『百科全書』刊行時のディドロらの動向を知る上で貴重である。

ド・プラード　Prades, Jean Martin de, 1720-1782

ド・プラードは神学生であったが、百科全書派に共鳴して『百科全書』にいくつかの項目を寄稿し、「確実性（De la certitude）」の項目（第２巻所収）は大きな成功を収めた。1751年にパリ大学神学部（ソルボンヌ）に博士号を申請していたが、イエス・キリストの神性への疑念を表明したなどとして神学部や教会から非難・断罪され、逮捕状が出されるに至ったためオランダへ逃れた。その後、ヴォルテールの口添えもありフレデリック２世によってプロシアのポツダムに迎えられた。後に、儀礼的に自らの意見を撤回し、シレジア地方（現ポーランド）でカトリックの聖職に復帰した。(I)

45.『ド・プラード師の弁明』

Apologie de monsieur l ’abbé de Prades. 1-2 partie. A Amsterdam, chez Marc Michel Rey, 1753. 2 v. 17 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||161||P）

オランダに逃れたド・プラードが、断罪された博士論文を第一部、弁明を第二、第三部として出版したもの。博士論文中の断罪された箇所について逐一弁明し、特にイエス・キリストの「癒し」についての断罪された見解が権威ある聖職者の見解と異なるものではないことを示そうとしている。

ルソー　Rousseau, Jean-Jacques, 1712-1778

ジュネーヴの時計職人の次男として生まれた。母と早く死別、父も10才のときニヨンへ逃亡。16才で彼もジュネーヴを去り、フランス国内を放浪する。ディドロとパリで会い、出世作『学問芸術論』（1750）を書く。『社会契約論』『エミール』『新エロイーズ』（1760-62）を主著とする。フランスでもジュネーヴでも彼の思想は受け入れられず、しだいに被害妄想を抱くようになった。『百科全書』には「音楽」の項目（Ｓのサイン）のほか、「政治経済論」を寄稿している。ダランベールの執筆した「ジュネーヴ」（第７巻、1757）の項目、特にジュネーヴに演劇が必要としている点が気に入らず、百科全書派の人々と最終的に決別することとなる。(K)

46.『人間不平等起源論』　＜写真19＞

Discours sur l ’origine et les fondemens de l ’inegalité parmi les hommes. A Amsterdam, Chez Marc Michel Rey, 1760. lxx, [2], 262, [2] p. 2 leaves of plates : ill., 21 cm. (8vo)（中央・貴　801||GENGO||135. 3||R）

1754年（42才）6月、ルソーはジュネーヴにもどり、カトリックからカルヴィニズムに改宗、市民権を獲得する。この論文はその頃完成していて、祖国ジュネーヴ共和国への熱烈な献辞がそえられている。しかしジュネーヴは４つの階級に分かれ、25名の小評議会が実権を握っていた。「自然状態」を想定し、人間が社会を構成していく過程で不平等が生じていくと説くが、「社会状態」の中でいかに政治を考え生きやすくしていくかが、ルソーの次の課題となる。その答えが「社会契約論」である。

47.『山からの手紙』

Lettres écrites de la montagne. A Amsterdam, Chez Marc Michel Rey, 1764. 3 pl., 368, [1]p. 16 cm. (12mo)（中央・貴　Hobbes Collection II　133||H||C14　Entry no. 368）

1762年6月19日、ジュネーヴ小評議会は、『エミール』『社会契約論』を焚書処分にし、ルソーに逮捕令状を出す。翌年、検事総長ロベール・トロンシャンは『野からの手紙』を発表、「天啓キリスト教の基礎をゆるがす」とルソーの有罪性を訴えた。悪い健康状態、論争に対する嫌悪感をおし

て、ルソーは９通からなる本書を執筆、市民の中のルソー擁護派へ訴えた。根底には祖国愛もあるが、自分の立場を弁論することが、彼の今後の身の安全にかかわることであった。第３信は「奇蹟」に関することで有名。

48．『奇蹟論』

Dissertation sur les miracles par Monsieur Jean-Jaques Rousseau, tirée de la troisième Lettre écrite de la Montagne. In : Collection des lettres sur les miracles : écrites a Geneve, et a Neufchatel par Mr. le Proposant Théro ... [et al.]. A Neufchatel, [s.n.], l ’an 1765. p. [217]-232 18 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||V）

「山からの手紙」の第３信を独立して出版したもの。『エミール』中の「サヴォアの助任司祭の信仰告白」でルソーは奇蹟批判を展開している。これはヴォルテールも感心する程に鋭いものであった。しかし、フランスのカトリックはもとより、ジュネーヴのプロテスタントからも強い反撥を生むことになった。ルソーはこれに対して、まずこの「信仰告白」はカトリックを念頭において書かれたと逃げる。次に奇蹟が啓示の唯一の証拠ではないことを、福音書に描かれたイエス自身の態度を引き合いに出して反論している。

ヴォルテール　Voltaire, 1694-1778

本名はフランソワ・マリ・アルエ。パリのブルジョアの出身。イエズス会の名門ルイ・ル・グランを卒業。ここで多くの名門貴族子弟の友人を得た。下級貴族とのいさかいからバスチーユに入れられ、身分制の不正を知る。イギリス亡命を条件に出獄、先進国イギリスの文物に触れ、いわば「カトリック一党独裁」のフランスを批判する視点を得た。1734年『イギリス書簡』（別名「哲学書簡」）に結実。危険視され以後パリ退去を余儀なくされた。フリードリッヒ２世の招きでベルリンにも赴くが、最終的に自立したのはフェルネーにおいてである（1758-1778）。ここで彼はフランス人からヨーロッパ人となって、ペンでヨーロッパに君臨した。『百科全書』の企画にいち早く賛同したが実際の寄稿は「趣味」「雑誌」など小項目のみ。自らは携帯できる辞典を考え、のち『哲学辞典』となる。(K)

49．『イギリス人についてロンドンからの手紙』

Lettres ecrites de Londres sur les Anglois et autres sujets, par M. D. V***. A Basle [i.e. Londres], [s.n.], 1734. [8], 228, [20] p. 18 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||V）

通常『哲学書簡』として知られているものであるが、この版の第25信は「パスカルへの反論」でなく「ロンドンの大火」となっている。ヴォルテールのイギリス亡命中（1726-1728）の見聞にもとづき、まず英語で書かれ次にフランス語に訳され、パスカル論が付加されたため３つのオリジナルが存在する。この版はそのうちの１つであり貴重。イギリスの宗教・政治・商業・科学・文芸にわたって報告しつつ、常にフランスの現実を批判している。刊行と同時に、パリ高等法院は宗教と良俗に反すると断罪した。

50．『50人の説教』

Sermon des cinquante. In : La bibliotheque du bon sens portatif, ou Recueil d ’ouvrages sur differentes matieres importantes au salut. Tome 3e. A Londres, [s.n.], 1773. [4], 135, [1] p. 14 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）

1749年に書かれ秘密裡に回覧された。ヴォルテールの聖書の批判的研究より生まれた。50名の賢者が集会をもち討論したのち、その代表１名が「祈り」と「説教」をする。「祈り」は宇宙と人類全体の神を讃える。「説教」は旧約と新約の記述の矛盾を指摘する。ヴォルテールがはじめて反キリスト教の旗幟を鮮明にし、理神論から「有神論」へ一歩踏み出している点が注目される。

51．『パリソへの手紙』

Lettres de M. Voltaire a M. Palissot de Montenoy, des 4 & 28 Juin 1760. Au sujet de sa Comédie des philosophes. [S.l., s.n.], [17--?]. 19, [1] p. 18 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||V）

1760年6月4日と28日（23日？）の手紙を収録している。パリソ（1730-1814）はイエズス会の教

育を受け、百科全書派に敵対する立場の文学者であったが、ヴォルテールには擦り寄っている。喜劇『哲学者たち』で「悪しき陰謀をたくらむにせ知識人たち」を愚弄した。ヴォルテールは息子を諭すように、君の作品の文体はよくできているが、彼ら（デュクロ、ディドロ、ダランベール、ジョクールら）は皆優秀な人物であり、『百科全書』の仕事は学問のための最大の金字塔だと述べる。

52.『カフェあるいはスコットランド女』

Le caffé, ou L ’ecossaise : comedie, par Mr. Hume, traduite en Français. Londres, [s.n.], 1760. [4], XII, [5]-204 p. 17 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||952. 59||G）

1760年の作品。ゴルドーニの作品を下敷にした５幕散文喜劇。パリソが『哲学者たち』でデイドロらを揶揄したお返しに、ヴォルテールは宿敵フレロンを揶揄する。ロンドンのカフェに出入りし雑文を書いて密告する男として描かれている。亡命中のスコットランドの女は貧しくとも徳をつらぬき一家の敵の息子と最後は結ばれる。ロンドンの商人フリーポートは文士や貴族を嫌うが儲けた金を惜まずこの有徳のスコットランド女に注ぐ。良きブルジョア精神が讃えられている。

53.『ジャン・メリエの遺言書要約』

Testament de Jean Meslier. Nouv. éd. In : La bibliotheque du bon sens portatif, ou Recueil d ’ouvrages sur differentes matieres importantes au salut. Tome 3e. A Londres, [s.n.], 1773. [4], 135, [1] p. 14 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）

ジャン・メリエ（1664-1729）は農民出身の司祭で一生をエトレピニで過ごした。死後、手記「遺言書」が発見され、秘密裡に回覧され、ヴォルテールも1735年頃読んだようである。神父や教会の偽善を暴き、キリスト教教義を批判、社会的不平等を訴え、人民の手で支配者を打倒せよとまで言う過激な内容である。ヴォルテールはこの遺言書の内容を要約することで（1762）、彼のいう「恥知らずな奴」（l ’infame）への攻撃の口火を切った。

54.『紳士の教理問答』

Catechisme de l ’honnet-homme, ou Dialogue ... In : La bibliotheque du bon sens portatif, ou Recueil d ’ ouvrages sur differentes matieres importantes au salut. Tome. 3e. A Londres, [s.n.], 1773. [4], 135, [1] p. 14 cm. (12mo) （中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||B）

1763年の作品。修道士と有徳の人との対話の形式をとってヴォルテールの宗教思想が集大成されている。旧約・新約聖書の非真実性、イエスの思想とキリスト教教義との乖離、教会の犯してきた誤ちを指摘したあと、自然宗教への熱烈な賛美でもって終る。『メリエの遺言書要約』と合冊。

55.『寛容論』

Traité sur la tolérance. [S.l., s.n.], 1763. iv, 183 p. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||V）

新教徒に信仰の自由を保証したナントの勅令が1685年、ルイ14世によって廃棄された。フランスのプロテスタントの悲劇はここにはじまる。ジャン・カラスがトゥルーズ高等法院により車刑に処せられたのも、長男殺害の証拠があってではなく、プロテスタントであるという予断による。カラス事件を契機に、ヴォルテールは25章をさいて、信仰の自由と寛容の精神の必要を説いた。

56.『哲学辞典』

Dictionnaire philosophique, ou la raison par alphabet. 1. - 2. partie. 7e ed. revue, corrigée & augmentée par l ’ auteur. A Londres, [s.n.], 1770. 2 v. 21 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||V）

1764年の初版本の項目数は73であった。展示中のこの版（７版）は項目が増加しているがまだ携帯できる範囲である。ピエール・ベールの『歴史批評辞典』また『百科全書』の企画の進行を見ながら彼は「携帯できる」鋭い短文の項目を目指した。冒頭の「神父」Abbé からすでに鋭い矢が飛んでいる。「あなたがたは無知と迷信と狂乱の時代を利用してわれわれの遺産を奪い、われわれを足下に踏みにじり、不幸な人々の糧で私腹を肥やしてきた。だが理性の日の到来に怯えたまえ。」

57.『奇蹟についての疑問』

Collection des lettres sur les miracles : écrites a Geneve, et a Neufchatel, par Mr. le Proposant Théro,

Monsieur Covelle, Monsieur Néedham, Mr. Beaudinet, & Mr. de Montmolin, &c. A Neufchatel, [s.n.], 1767. [4], 258 p. 17 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||135. 3||V）

1765年、ジュネーヴの牧師クラパレードは、ルソーの『山からの手紙』第３信に反論し『福音書の奇蹟についての考察』を発表した。これにさらにヴォルテールが反論したのが本書。奇蹟を迷信として突っぱねるヴォルテールの立場はある意味では単純と言えよう。一般的に18世紀自由思想家の奇蹟論は、神の啓示の「権威」を証明するものとしての奇蹟を否定して、キリスト教神学の根底を揺がす大問題を提起した。

58.『歴史哲学』

La Philosophie de l ʼhistoire. Par feu l ʼabbé Bazin. [Geneve, s.n.], 1765. viii, 336 p. 21 cm. (8vo)（中央・貴 Hobbes Collection II　133||H||C4　Entry no. 424）

1765年故バザン師の作品として発表。もちろんいつも通りの韜晦であり、歴史家ヴォルテールの作品である。のち、『風俗試論』の序論となる。ボシュエの『世界史論』（1681）を意識し乗り越えようとしている。歴史はユダヤ教からキリスト教が成立してきて、すべての事件はキリスト教の勝利を証明するように処理されてはならないと考えている。中国・インド・エジプトの文明を並置し、ヨーロッパ中心主義を排している。ラルシェルに反論され、バザンの甥になりすまし、さらに『わが叔父の弁護』を書く。

59.『「犯罪と刑罰」の書の註釈』　＜写真20＞

Commentaire sur le livre des délits et des peines, par un avocat de Province. [S.l.: s.n.] 1766. 120 p. 20 cm. (8vo)（中央・貴　Hobbes Collection III　326. 01||V）

イタリアの啓蒙主義者ベッカリアの『犯罪と刑罰』（1764）はヨーロッパ全体に反響を呼んだ。モレレ師の仏訳が出てヴォルテールもこの覚書を書いた。刑罰の一般的緩和、拷問の禁止、死刑の廃止を訴える書物に対し、自らもカラス事件、ラバール事件で裁判の不正や苛酷な刑罰を目撃したヴォルテールは最大の共感をこのイタリアの同時代人に送っている。

60.『中国からのイエズス会士追放報告』

Relation du bannissement des jésuites de la Chine. [S.l., s.n., 17--]. 31, [1] p. 17 cm. (8vo)（中央・貴 135||ZIYUSISO||193. 6||H）

中国でのカトリック布教は儒教の思想体系と衝突する。ローマ法王が、孔子や祖先の祭祀の禁止、デウスは「天主」であり「天」や「上帝」でない旨決定すると康熙帝は激怒する。やがて布教禁止、イエズス会士の追放へ発展する。この作品は雍正帝（1723-35）とイエズス会士リゴレの対話を「再現」する形をとる。儒教の世俗道徳や清朝の開明的専制に期待していたヴォルテールの立場は、リゴレ（rigoler は仏語でふざける）という命名からしてすでに明らかである。

B．補遺の執筆者

シャトゥリュ　Chastellux, François Jean, marquis de, 1734-1788

シャトゥリュはアメリカ独立戦争にも参加した軍人であり、ヴォルテールや百科全書派の影響を受けた作家でもあった。『百科全書』補遺の「理想」の項目では、理性や自然に従おうとする古典主義芸術観（自然模倣説）から脱却した自律した芸術論へと向かったことで知られる。芸術の起源は快適な感覚・快楽の追求にあるとし、古代人の教えるような理想美を至上のものとしながらも、それはむしろ作品鑑賞の経験に基づいて創造されるものだとした。(I)

61.『公共の福祉について』

De la félicité publique, ou Considérations sur le sort des hommes dans les différentes époques de l ʼhistoire. Nouvelle édition, revue, corrigée, & augmentée. A Bouillon, De l ʼImprimerie de la Société typographique, 1776. 2 v. 20 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||204||C）

社会に平和と幸福をもたらす方途を探ろうという意図のもとに書かれた古代から当代までの人間社会の歴史であり、特に古代の社会の習俗と制度について新たに光を当てた点が注目される。

コンドルセ　Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, marquis de, 1743-1794

ピカルディ州リブモンに生まれた。数学の天分をダランベールにみいだされ、パリに出て啓蒙思想家となった。ヴォルテールの影響下に合理的社会哲学を構想した。チュルゴが財務総監となったとき造幣局総監に登用され（1774）、旧体制の改革のために努力した。また、1782年よりアカデミー会員となり、常任幹事となって、『百科全書』の精神を学問の制度改革に生かそうと奮闘した。フランス革命時には、立法議会の教育委員会、国民議会の憲法委員会で活躍した。ジャコバン憲法を批判し、死刑判決を受け、逮捕され、獄中で自殺した。啓蒙思想家最後の世代に属し、啓蒙思想の総括的著作を多く残した。(An)

62.『ミシェル・ドゥ・ロピタル頌』

Eloge de Michel de l'Hopital, Chancelier de France. Paris, Demonville, 1777. 124 p. 24 cm. (8vo)（法学部 311. 42||C754）

アカデミー常任幹事の仕事として、コンドルセは学問の発展に寄与した知識人の称伝を定期的に著わした。そのひとつに、フランス寛容精神史に輝く17世紀の知識人、ミシェル・ドゥ・ロピタルもとりあげられた。

63.『公人叢書』　＜写真21＞

Bibliothèque de l'homme public ; ou Analyse raisonnée des principaux ouverages francois et étrangers, sur la politique en général, la législation, les finances, la police, l'agriculture, le commerce en particulier, sur le droit naturel & public. A Paris, Chez Buisson, libraire..., 1790-1792. 28 v. in 14. 20 cm. (8vo)（経済学部 Rare||363. 12||C86||B-1-14）

フランス革命の激動のなかでコンドルセが中心となって出版した叢書で、マキャベッリ、モンテスキュー、アダム・スミスなど、古典的理論を要約解説したもの。近代的公共性を担う資質をすべての人間が備えるべきだという、コンドルセのメッセージが伝わってくる。

64.『立法議会および他国民議会の機能について』

Sur les fonctions des Etates-généraux et des autres assemblées nationales. Tome 1-2. [S.l., s.n., 1798] 2 v. 7 fold. tables. 21 cm. (8vo)（経済学部　Rare||311. 235||C86||Su-1-2）

コンドルセは、チュルゴの集権的理論とモンテスキューの分権的理論とを総合する議会論を構想していた。彼の死後も、それは、特に自由派にとっての導きの星として、熱心に読まれた。

65.『人間精神進歩史』

Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain. 4. éd. A Paris, chez Agasse, An VI (1798). Viij, 392 p. 21 cm. (8vo)（中央・貴　102||C）

ロベスピエール権力によって死刑判決を出されたコンドルセが、逃亡生活のなかで1793-1794年に書いた遺作。全体を10期にわけ、人間の精神と学問の発展を整理している。進歩史観の代表作とされている。

66.『コンドルセ全集』

Œuvres complétes de Condorcet. Tome 1-21. Brunsvic et Leipsic, chez F. Vieweg, et a Paris, chez Fuchs, An IX (1804). 21 v. 21 cm. (8vo)（中央・貴　Hobbes Collection III　135. 3||C）

コンドルセ夫人にカバニスやガラという自由派の指導的思想家が協力してまとめた、コンドルセ死後最初の著作集。ナポレオンの権力が強化されるなかで、フランス革命の自由の理念の回復への願いをこめて編まれた。政治、法、経済、社会、科学、教育など、多方面にわたるコンドルセの思想の広さと深さをうかがうことができる。

ロビネ　Robinet, Jean Baptiste, 1735-1820

1761年に初版が出た特異な哲学書『自然について（De la nature）』で名を知られ、文法家として『英語文法（Grammaire anglaise）』（1764）、『フランス語文法（Grammaire francaise）』（1768）などを出版した。『百科全書』補遺（1776-1777）の編集者（Editeur）であったと考えられており、補遺の

注記などから彼によって執筆された項目は1000以上に昇ると想定される（彼は『百科全書』本編には参加していない）。ヒュームの著作を始め、小説などを数多く英語から翻訳した。その他にも出版にたずさわり、1780年には後ろ楯を得て出版物検閲官にまでなった。革命期には故郷のレンヌに戻り、この地で没した。(I)

67.『自然について』　＜写真21＞

De la nature. A Amsterdam, chez E. van Harrevelt, 1761. xx, 456, [4] p. ill. 20 cm. (8vo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||112||R）

ロビネはこの書で、あらゆる存在は動物にとどまらず植物、鉱物に至るまで生命を持ち、繁殖能力を持っているとする特異な物活論的唯物論を唱えた。自然界に存する生命の胚が成長して動物などの個体となるが、その個体は死によって再び生まれる前の状態に帰るとした。また、世界においては善と悪が均衡に向かうと考えた。その理論の特異さのゆえに、唯物論の著作でありながら弾圧を招かなかったと言われる。

68.『人間の条件と能力の他の動物との比較』

Parallèle de la condition et des facultés de l ’homme avec la condition et les facultés des autres animaux : Ouvrage traduit de l ’Anglois, sur la quatrième édition. A Bouillon, Aux dépens de la Société typographique, 1770. xij, 164 p. 18 cm. (12mo)（中央・貴　135||ZIYUSISO||143. 8||R）

英語の著作からの翻訳という体裁で出版された。人間が自らの諸能力を用いて、自らの生存の条件を改善するために利益をいかに引き出しうるかを、他の動物との比較のもとに論じている。

ズルツァー　Sulzer, Johann Georg, 1720-1779

1720年、スイスのチューリッヒ近郊に生まれる。神学を志し、かたわら当地の批評家らの影響を受けながら多方面の教養を収めた。1747年、ベルリンに移り、ギムナジウムの数学教師の職を得、のちベルリン学術アカデミー会員となる。1762年頃から、主著「芸術の一般理論」にとりかかる。1765年、プロイセン王の招請により、École militaire の哲学教授。1775年、上記アカデミーの哲学部門主席。(Ar)

69.『芸術の一般理論』　第２版

Allgemeine Theorie der schönen Künste in einzeln, nach alphabetischer Ordnung der Kunstwörter aufeinanderfolgenden, Artikeln abgehandelt. Neue verm. 2. Aufl. Theil 1-4. Leipzig, Weidmannsche Buchhandlung, 1792. 4 v. 23 cm. (8vo)（文学部）

初版は1771-74年。表題に「芸術用語をアルファベット順の項目として」扱うとあるように、事典形式の理論書である。文芸、美術、音楽にわたる分野の重要な概念に充実した理論的記述がなされている。別巻の索引も遺漏なく作られている印象を受ける。百科全書補遺には彼の名による項目がいくつかあるが、補遺緒言によればそれは、いくつかの項目をさる「同僚」が、自分の名を伏せる条件で、取捨翻訳してフランスに送ったものであるという。

[主要参考文献]

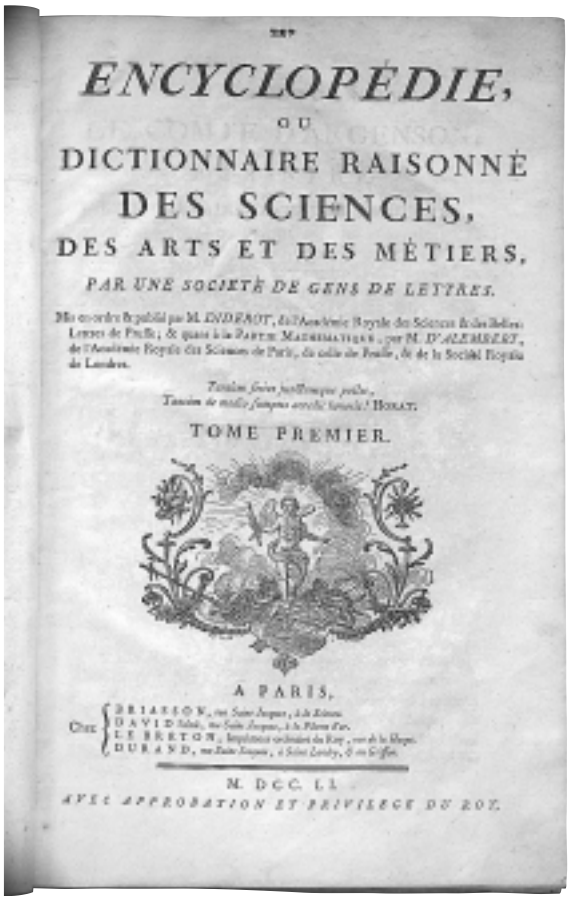
Lough, John. *The contributors to the “Encyclopédie.”* London, Grant and Cutler, 1973.

Kafker, Frank A. & Kafker, Serena L. *The Encyclopedists as individuals : a biographical dictionary of the authors of the Encyclopédie.* Oxford, Voltaire Foundation at the Taylor Institution, 1988

Larousse, Pierre. *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle : français, historique, géographique, mythologique, bibliographique, littéraire, artistique, scientifique, etc.* Paris, Administration du Grand dictionnaire universel, 1866-1879

小林道夫他編『フランス哲学・思想事典』弘文堂　1999

J. プルースト著　平岡昇、市川慎一訳　『百科全書』岩波書店　1979



ENCYCLOPÉDIE,

OU

DICTIONNAIRE RAISONNÉ

DES SCIENCES,

DES ARTS ET DES MÉTIERS,

PAR UNE SOCIÉTÉ DE GENS DE LETTRES.

Mis en ordre & publié par M. DIDEROT, de l'Académie Royale des Sciences & des Belles-Lettres de Prusse; & quant à la PARTIE MATHÉMATIQUE, par M. D'ALEMBERT, de l'Académie Royale des Sciences de Paris, de celle de Prusse, & de la Société Royale de Londres.

Tantùm series juncturaque pollet,
Tantùm de medio sumptis accedit honoris! HORAT.

TOME PREMIER.

A PARIS,

Chez { BRIASSON, rue Saint Jacques, à la Science.
DAVID l'aîné, rue Saint Jacques, à la Plume d'or.
LE BRETON, Imprimeur ordinaire du Roy, rue de la Harpe.
DURAND, rue Saint Jacques, à Saint Landry, & en Grèce.

M. DCC. LI.

AVEC APPROBATION ET PRIVILEGE DU ROY.

写真１.『百科全書　学問・技芸・工芸の合理的辞典』扉絵と標題紙

『学問・技芸・工芸についての図版集』

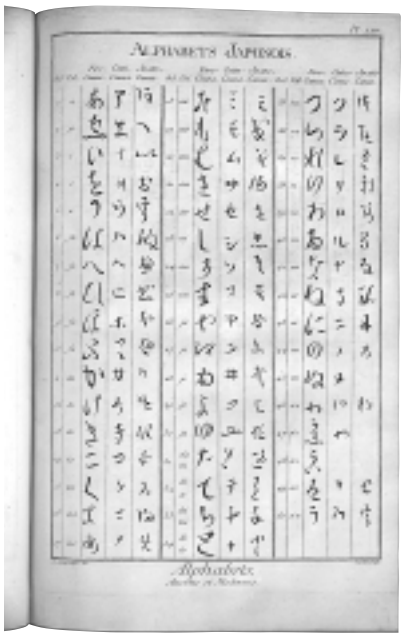


写真２.「日本文字」

写真３.「外科学」

写真４.「オランウータンとテナガザル」

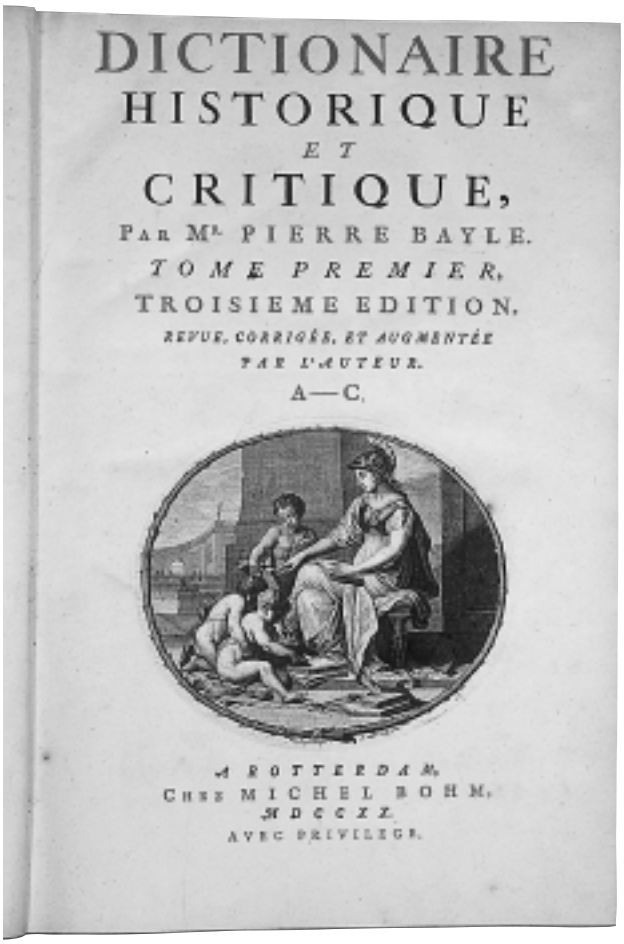

DICTIONAIRE
HISTORIQUE
ET
CRITIQUE,
PAR Mr. PIERRE BAYLE.
TOME PREMIER,
TROISIEME EDITION,
REVUE, CORRIGÉE, ET AUGMENTÉE
PAR L'AUTEUR.
A—C.
A ROTTERDAM,
CHEZ MICHEL BOHM,
MDCCXX.
AVEC PRIVILEGE.

写真５．ベール『歴史批評辞典』

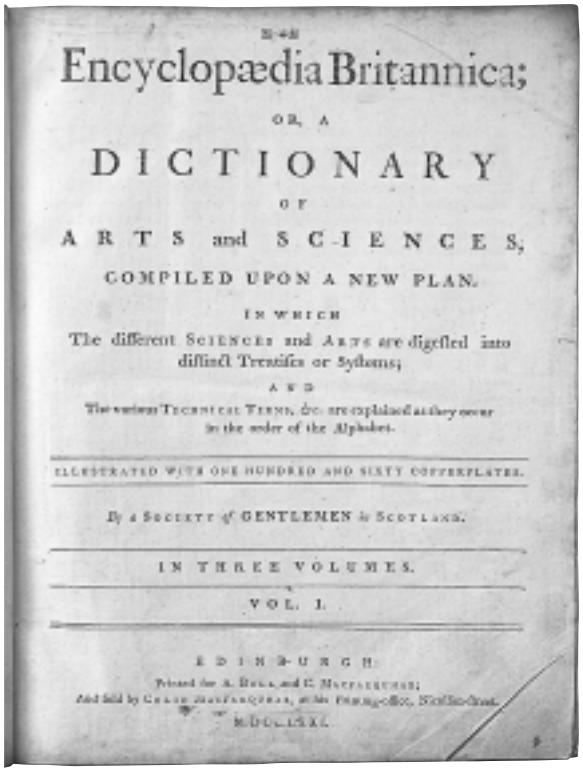
Allgemeines
Historisches
LEXICON,
in welchem
das Leben und die Thaten
derer Patriarchen, Propheten, Apostel, Väter der ersten
Kirchen, Päbste, Cardinäle, Bischöfe, Prälaten,
verrichter Geistl. Gelahrten, nebst denen Ketzern;
Käyser, Könige, Chur- und Fürsten,
grosser Herren und Ministen;
derer berühmten Gelehrten, Scribenten und Künstler;
die Beschreibungen derer Käyserthümer, Königreiche, Fürstenthümer,
Erster Theil.
A—D.
Leipzig,
verlegts Thomas Fritsch. 1722.

写真６．『総合歴史事典』

写真７．『学芸・科学百科事典（サイクロペディア）』

DICTIONNAIRE
UNIVERSEL
FRANCOIS ET LATIN,
CONTENANT
PRINCE SOUVERAIN DE DOMBES.
TOME PREMIER.
A PARIS,
M. DCC. LII.

写真８．『フランス・ラテン汎用辞典』



Encyclopædia Britannica;

OR, A

DICTIONARY

OF

ARTS and SCIENCES,

COMPILED UPON A NEW PLAN.

IN WHICH

The different SCIENCES and ARTS are digested into distinct Treatises or Systems;

AND

The various TECHNICAL TERMS, &c. are explained as they occur in the order of the Alphabet.

ILLUSTRATED WITH ONE HUNDRED AND SIXTY COPPER-PLATES.

By a SOCIETY of GENTLEMEN in SCOTLAND.

IN THREE VOLUMES.

VOL. I.

EDINBURGH:

Printed for A. Bell, and C. Macfarquhar;

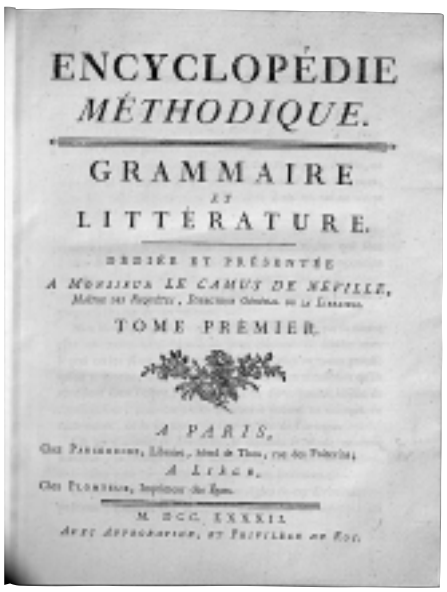
And sold by Colin Macfarquhar, at his Printing-office, Nicolson-Street.

M.DCC.LXXI.

写真９．『エンサイクロペディア・ブリタニカ』

LE GRAND SERIN.

写真10．ビュフォン『一般的・個別的博物誌』
（王立印刷局『ビュフォン全集』版）



ENCYCLOPÉDIE

MÉTHODIQUE.

GRAMMAIRE

ET

LITTÉRATURE.

REDIGÉE ET PRÉSENTÉE

A MONSIEUR LE CAMUS DE NÉVILLE,

Maître des Requêtes, Directeur Général de la Librairie.

TOME PREMIER.

A PARIS,

Chez Panckoucke, Libraire, Hôtel de Thou, rue des Poitevins;

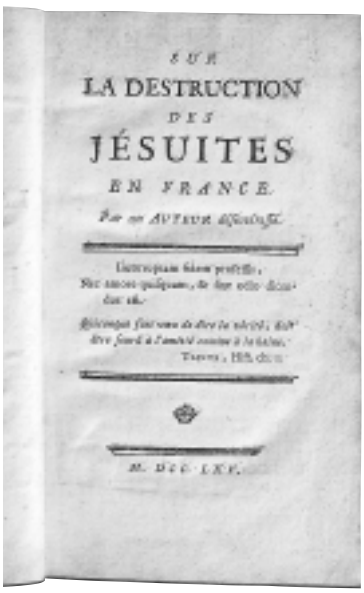
A LIÈGE,

Chez Plomteux, Imprimeur des États.

M. DCC. LXXXII.

AVEC APPROBATION, ET PRIVILÈGE DU ROI.

写真11．『文法と文学（系統的百科事典）』



SUR

LA DESTRUCTION

DES

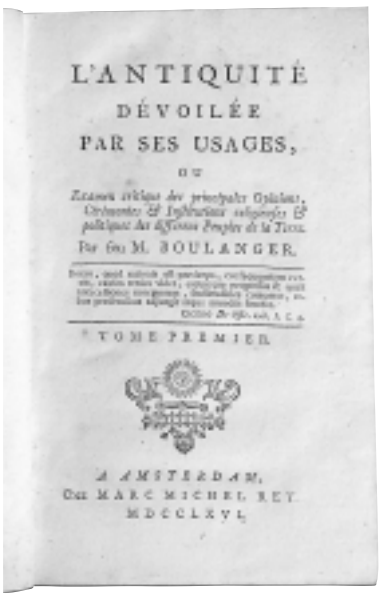
JÉSUITES

EN FRANCE.

Par un AUTEUR désintéressé.

M. DCC. LXV.

写真12．ダランベール
『公平な著者によって書かれた、フランス
におけるイエズス会の解体について』



L'ANTIQUITÉ

DÉVOILÉE

PAR SES USAGES,

OU

Examen critique des principales Opinions, Cérémonies & Institutions religieuses & politiques des différens Peuples de la Terre.

Par feu M. BOULANGER.

TOME PREMIER.

A AMSTERDAM,

Chez MARC MICHEL REY.

MDCCLXVI.

写真13．ブランジェ
『明かされた古代』

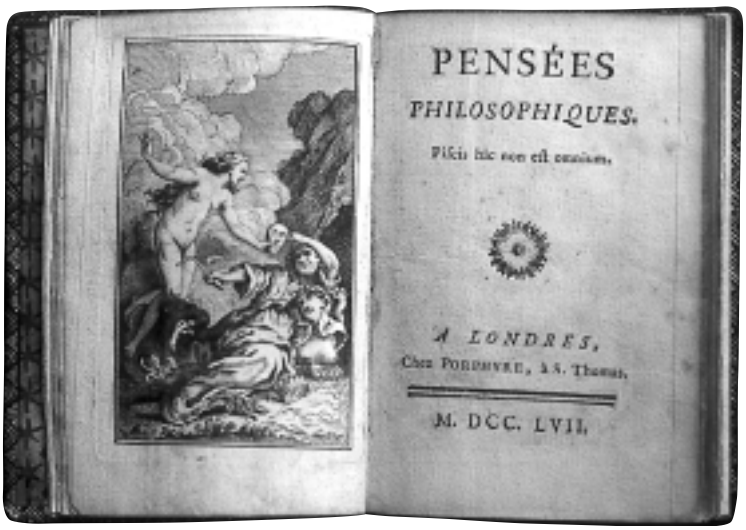


写真14．ディドロ『哲学断想』

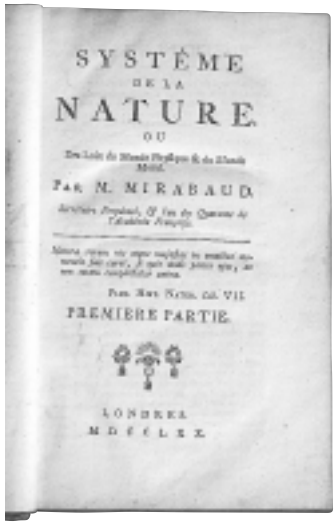


写真15．ドルバック『自然の体系』

写真16．マルモンテル
『ソクラテスの弟子からアテネ市民への書簡詩』

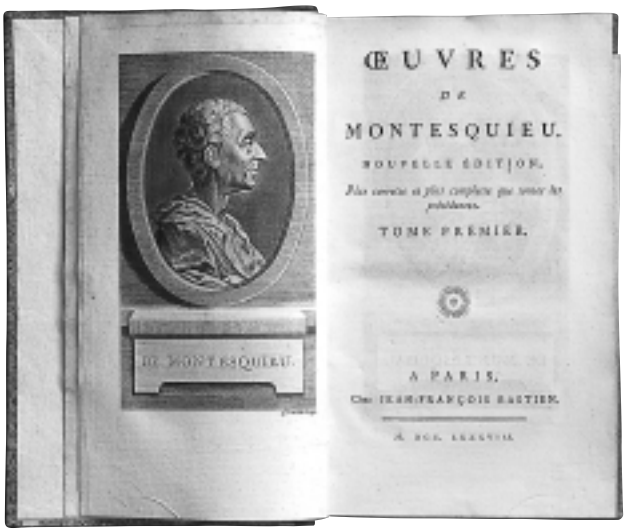


写真17．モンテスキュー『モンテスキュー著作集』

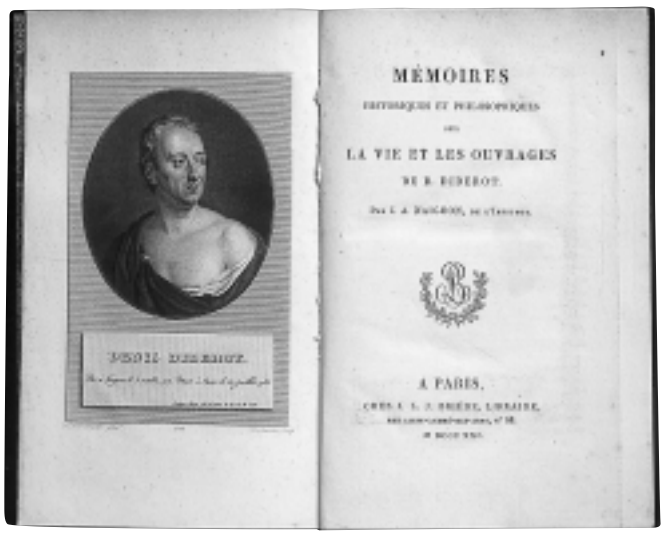


写真18．ネジョン『ディドロの生涯と著作についての年代順哲学的回想録』

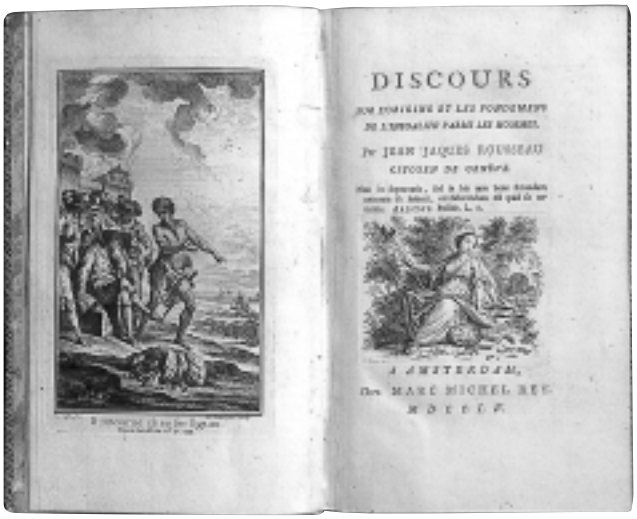


写真19．ルソー『人間不平等起源論』

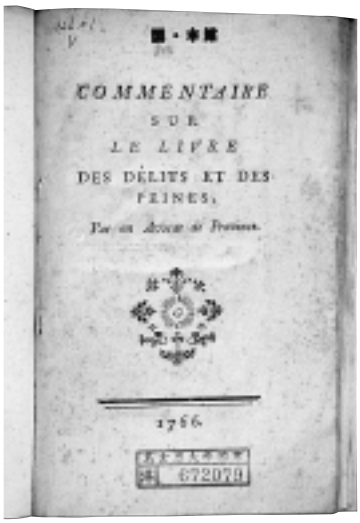


写真20．ヴォルテール『「犯罪と刑罰」の書の註釈』

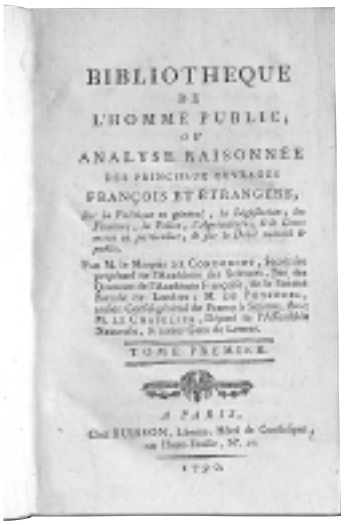


写真21．コンドルセ『公人叢書』

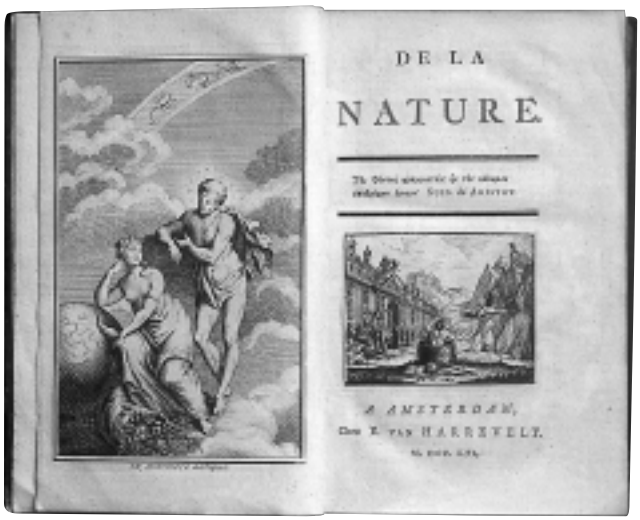


写真22．ロビネ『自然について』

展示会協力者氏名（敬称略　50音順）

有　川　貫太郎	言語文化部教授
安　藤　隆　穂	経済学部教授
飯　野　和　夫	言語文化部助教授
熊　澤　一　衛	言語文化部教授
吉　村　正　和	言語文化部教授

実行委員

戒　能　通　厚	附属図書館長・法学部教授
田　村　潤　二	附属図書館事務部長
三　池　愼三郎	同情報サービス課長
濱　島　　聡	同情報管理課
横　田　佳　子	同上
中　井　えり子	同情報サービス課
渡　邉　通　江	同上
久　宗　順　子	同上
夏　目　弥生子	同上
加　藤　信　哉	同情報システム課
小　林　祐　二	同上

記 念 講 演 会

日時：1999年11月27日（土）　午後１時30分～３時

場所：名古屋大学中央図書館大会議室（５階）

演題：「百科全書 －本文と図版の世界－」

講師：鷲見洋一氏（慶應義塾大学文学部教授）

電子展示アドレス

http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tenji/

『百科全書』とその時代展

発行日　1999年11月22日
発　行　名古屋大学附属図書館
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
ＴＥＬ　052−789−3667
ＦＡＸ　052−789−3693